追悼　河鍋楠美氏

河鍋暁斎のご曾孫、河鍋楠美氏が去る６月２９日にご逝去されていたことが河鍋暁斎記念美術館によって公表されました。95 歳でした。氏の長年にわたる暁斎の顕彰と研究がなければ、このたびの「河鍋暁斎の世界」展もあり得えません。主催者を代表して、本展へのご支援に感謝するとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

本展は、４月２２日にサントリー美術館で開幕し、神戸市立博物館に巡回したあと、現在は静岡県立美術館で開催中です。氏の生前中に実現できた本展が、何よりの「はなむけ」となりました。静岡における開会式で、私は、個人的な思い出を交えつつ、こんなご挨拶をいたしました。

暁斎がこの世を去った 1889（明治 22）年は、今から振り返れば、日本社会における新しい美術の世界が整い出す転機でした。美術学校が生まれ、美術団体がこぞって展覧会を開催し、政府は博物館を整備する中で、暁斎の名は次第に忘れられてしまいます。

それから百年後の 1980 年代に、再び暁斎に光が当たったのは、疑いなく楠美氏の牽引によるものでした。77 年創設の暁斎記念館は、86 年に財団法人河鍋暁斎記念美術館となり、同館発行の研究誌『暁斎』とともに、暁斎研究の拠点となりました。そして、これを基盤に、各地の美術館で暁斎の展覧会が相次いで開かれ、研究者も育ち、暁斎の復活を揺るぎないものにしたのです。日本美術を振り返り、見直すためのキーパーソンが暁斎にほかなりません。

私の個人的な思い出とは、1990 年に企画した展覧会で暁斎を紹介し、楠美氏の知己を得たことです。以来 36 年にわたってご指導を賜りました。ここに忘れられない 1 枚の写真を掲載します。私が東京大学で開講した「『暁斎画談』を読む」にご登壇いただいた時の記念写真です。もちろん、暁斎が可愛がり、暁斎に憧れた愛弟子暁英ことジョサイア・コンドル先生とのツーショットです。また、受講生とともに信州の戸隠神社に暁斎の足跡を訪ねた時には、「私も行きたい！」とおっしゃいましたが、「でも次の日に京都に行かなければならない。残念だけれど断念」というぐらい、暁斎のこととなれば我を忘れ、精力的に飛び回っておられました。

もし河鍋楠美氏が、このたびの「河鍋暁斎の世界」展を訪れてくださったなら、どんなに喜ばれたでしょう。容易に想像ができる満面の笑みを、実際に展覧会会場で見られないことが残念でなりません。どうか、安らかにお眠りください。



2026 年 11 月 1 日

静岡県立美術館
館長　木下直之